十返舎一九最後の作品

年未詳「結の神十返舎一九作「結神末松山」上巻」

松田三左衛門家文書（当館蔵）デジタルアーカイブへ

翻刻文

結神末松山序

釈名に曰、剣は検なり、非常を防検する所以とかや、然れども、霊あるの剣は、その人の徳に属して、光を顕せども、小人愚鈍の手に入りては、木刀にひとしく、益なきのみにあらず、反て災禍を生ずる基となるべし、男子平生にこれを帯するは、悪を制し善を行ふことを忘れざらしめんが為なり、爰に近江の国桜谷に一人の奇士あり、ひと振の宝剣を得てより、おのれが才能に慢じ、芸道に誇り、邪路に落て、遂に非命の死につきしは、身の分際を弁ずして、過富の利欲に迷ふが故也、その善悪の禍福をあげて、慰本となし、且武州松山稲荷の霊験を附会して、かくは表題を蒙らしむ、

天保八丁酉年正月吉日

十返舎一九遺稿

解　説

十返舎一九は、駿府府中（静岡）の下級武士の子として生まれ、若いころ江戸に出て、旗本小田切直年に仕えました。直年が大坂町奉行になったのに従い大坂へ行き、のち武家奉公をやめたといわれています。

大坂では近松余七の名で浄瑠璃作者となったあと、再び江戸に出て、出版業者蔦屋重三郎の食客となって仕事を手伝ううちに、戯作の道に入りました。

以後多くの黄表紙、洒落本などを刊行、なかでも1802年（享和2）出した「東海道中膝栗毛」は大ヒットとなり、一躍人気作家の仲間入りをしました。一九は原稿料だけで生活を維持できた最初の職業作家といわれていますが、その背景には、貸本屋を通じた一般大衆読者の増加と、交通制度の整備による庶民の旅の隆盛があったことも見逃せません。

資料の注目ポイント

資料の「結 神末松山」は十返舎一九作、歌川国貞画の合巻です。「十返舎一九遺稿」とあり、一九の死後に出版された作品です。現段階では、一九最後の作品といわれています。1837年（天保8）に江戸馬喰町2丁目（現在の東京都中央区）の山口屋藤兵衛によって出版されたことが表紙の裏から分かります。

近江国（滋賀県）桜谷の真野兵太郎（時連）が宝剣を手に入れてから、自分の才能に慢心してしまい、邪道に落ちて、最期には非命の死を遂げる様子を描いた作品です。

現代語訳

後漢末の劉熙による辞典「釈名」によれば、「剣は検である。非常を防ぐ検であるというのがその理由である」ということだ。しかしながら、霊験のある剣はその人の徳によって光を発するが、徳のない人や愚鈍な人の手に入ってしまえば木刀に等しく、利益がないだけでなく、かえって災禍を発生する元となるだろう。男子が常に帯刀するのは、悪を制し善を行うことを忘れないようにするためである。

ここ近江国の桜谷に一人の奇人がいた。一振りの宝剣を手に入れてから、自分の才能に慢心して芸道におごり、邪道に落ちて遂に思いがけない災難で死んだのは、身の分際をわきまえず、過富の利欲に迷ったためである。その善悪の禍福を挙げて慰本を書き、さらに武蔵国の松山稲荷の霊験を加えて、このように表題をつける。

天保八丁酉年正月吉日　　十返舎一九遺稿

関連資料、展示等

名称	概要	備考
「結の神十返舎一九作「結神末松山」上巻」	**松田三左衛門家文書（当館蔵）** **資料番号 A0169-02435**	**デジタルアーカイブ福井で閲覧可能。** （表紙）　https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-327001-1-p1 （序）　https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-327001-1-p2

参考文献等

『歌川国貞　これぞ江戸の粋』（日野原健司　2016 年　東京美術）
『叢書江戸文庫 43　十返舎一九集』（棚橋正博　1997 年　国書刊行会）
『笑いの戯作者　十返舎一九』（棚橋正博　1999 年　新典社）

「結神末松山　6 巻」　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10301629　（2017 年 11 月 4 日閲覧）
「国土交通省 関東地方整備局 横浜国道事務所　東海道への誘い　東海道と人物」
https://www.ktr.mlit.go.jp/yokohama/tokaido/02_tokaido/04_qa/index5/answer3.htm　（2022 年 5 月 6 日閲覧）